

諏訪アライアンスプロジェクト さいか（長野県下諏訪町）

できることから始める

身の丈の連携が大きな力に変わる

事務局
（NPO 法人匠の町しもすわ
あきないプロジェクト
専務理事）

はら まさひろ
原 雅廣



1. 諏訪地域の概要

諏訪地域は長野県のほぼ中央に位置し、人口は6市町村で約21万人、諏訪湖や霧が峰高原、八ヶ岳といった豊かな自然に囲まれ、また、精密工業の集積地として産業にも恵まれてきました。しかし近年、地方都市の市街地においては、商業地域の空洞化が進み、空き店舗が軒を連ねる状況は全国的な社会問題として一般化しつつあります。諏訪地域においても例外ではなく、特に諏訪湖周囲の三市町においては古くから商業地域が発展していただけない、中央市街地の空き店舗化が大きな問題になっていました。

2. 活動開始の背景・経緯

しかし、数年前から、各市町では、もう一度市街地に賑やかさを取り戻そうと幾つもの団体や個人が新しい活動を始めそれが少しずつ萌芽を始めています。しかし、これは意外なのですが、この市町村の時間的な距離は車で移動すれば数十分程度の僅かなのですが、同じような活動をしている方々との交流の機会はなかなかきっかかりがなかったのが実情でした。市町村間の見えない壁があったわけでもないでしょうが、其々の活動は基本的にボランティア活動を中心に行われていることから活動の主体者の多くは昼間仕事があり、夜の僅かな時間を其々の活動に充てていることから中々他との活動への時間を割くこともなく、お互いの活動に興味はあっても、お互いを知るすべは新聞等の報道で知るくらいでした。

そんな折、2005年、下諏訪でひとつのきっかけが生まれました。NPO法人匠の町しもすわあきないプロジェクト（以下匠P）は毎年『ぶらっとSHOPS』というクラフトイベントを下諏訪で主催しています。このイベントに岡谷市でチタンジュエリーを製造販売する『凝理道』が

参加していたのですが、匠P専務理事原（以下、原）は、『凝理道』を切り盛りする柴氏と顔見知りであったこともあり、このときもイベント会場で挨拶をしながら何気に立ち話をはじめました。柴氏は『凝理道』の商品拡販の一環として以前から諏訪地域のイベントに参加していたことから、この地域のまちづくりに関わる幾つかの団体と交流がありました。柴氏はその活動を通じて、『個々の活動は其々素晴らしいのに、皆、何故、バラバラで交流しないのだろう』という疑問を持っていました。原も、同じように、以前から新聞等で見かける近隣のまちづくり団体と交流することでお互いを高めることができるのではないかと漠然と考えていました。このとき二人は立ち話の中でそんな事を話し合いながら、柴氏が仲立ちをして一度、どこかで飲み会で良いから皆が集まる機会を作ろうという話でその時は終わりました。

それから数ヶ月後、2006年1月、諏訪市上諏訪駅前にある『いずみや』という豆腐料理屋へ柴氏の音頭で何人かが集まりました。諏訪サブリ柳沢氏、清野氏、宮坂氏、諏訪TMO柿崎氏、そして原の面々でした。『いずみや』は上諏訪駅前商店街の若者を中心とする『諏訪サブリ』の主要メンバーである宮坂氏が切り盛りするお店です。そしてこのとき初めて、諏訪・下諏訪・岡谷の面々が顔を会わせることができたのです。原は自身の活動の話と併せて其々の街での活動を、緩やかに連携して小さな力が集まることで、1+1が3にも5になるのではと、諏訪湖周辺のまちづくりの団体や個人の有志が集まり、【アライアンス】《同じ意志を持った同志、仲間の連帯》という、新しい連携の仕組みを提案しました。皆その有効性に異議を唱える人などなく、むしろ是非進めようと、ほどなく、この集まりを継続して毎月行

おうという話になりました。

それから毎月会を重ねていく間に色々なアイデアが生まれていきました。『諏訪の和菓子屋さんを一箇所に集めてみたい』『其々でやっているイベントを同時開催にして、スタンプラリーやバスを走らせたい』『マップもつくりたいね』等等。そんなアイデアをアイデアに終わらせないで、実際にやってみようと、自然にそんな話になっていきました。『まず、やってみよう』と。原はこれらのアイデアを計画表にまとめ、実行のためのスケジュールづくりを行いました。時季は既に春を迎えようとしていま

毎月集まっているたびに、仲間が少しずつ増えていきました。気がつくくと毎回10人以上が集まるようになっていました。そこで、この集まりの名前をつくらうという話になり、その任務を諏訪サブリ柳沢氏に託しました。そして、彼女から提案された言葉が『さいか』でした。『さいか』のサイは色彩のサイ、才能のサイ、再開、再起、再生のサイ、“采は投げちゃった!!”のサイ、カは華の力、加わるの力、可能性の力、万物を造成する造化の力、果敢の力、稼ぎ出すの力など・・・皆の色々な思いを載せた名前として考えられたのです。

『さいか』の狙いは、個々の活動を通じて得た情報や人脈を個々で持つだけでなく、この『さいか』という【アライアンス】を通じてお互いが相談し合い、其々が必要とする情報や人材をお互いで紹介しお互いを助けあうことで、相乗的に其々の活動を高めることだと原は考えました。実際に彼らの目標は、まず其々のフィールドで、其々の『華』をもっと沢山咲かせることであり、【アライアンス】は決して其々の行動を縛るのではなく、互いに違う街の特色を活かして、お互いの『自由と責任』の基に、【SUWA】をより

多くの人達と一緒に楽しもうという
ことで動きはじめました。



さいかメンバー

3、具体的な活動

『さいか』として、皆でまとまったかたちで何かしたい、一般的にはイベントという手法がまとまりやすくわかり易いねということで、前述にあった『お菓子』を切り口に実施しようという話になり、『スウィイチ』が始まりました。『スウィイチ』の意味は、諏訪地域の若者言葉で、諏訪湖を車でドライブ一周すること、との話が一人の仲間からあり、『ぐるっと、諏訪一周!』という意も込めて、この『スウィイチ』をイベントタイトルとしました。

『さいか』には代表を置いていません。『さいか』はあくまでも連携体であり、お互いを助け合い、繋がることで夫々の活動を補完し合うという趣旨での集まりです。故に『スウィイチ』においても、実行委員会という形式を用いず、今まで、それぞれの地区でやっているイベントを持ち寄り、それを『スウィイチ』としようとした。これであれば無理に全体をまとめる必要なく、夫々の地区が身の丈でできるという考えで実施しました。第一回『スウィイチ』は2007年2月に実施しました。実施エリアは諏訪湖周の3市町、8団体の参加、各地区にメイン会場を設置し、導線はバスで人を回遊させるというシンプルな仕掛けでした。各会場の中身は各地区の仕切りで実施、全体の共有物はちらしという方式でした。共通コンセプトは『お菓子～をかし』ということで、各地区のお菓子屋さんの出店をお願いしながら、それぞれの地区内でのアイデアを持ち寄るかたちでコンサートやゲームなど多彩なイベントが持ち込まれました。結果的に、この初回での全体参加店舗は僅か二十数店舗、岡谷会

場に至っては、会場として手を上げた一店舗の参加のみでしたが、当日約5千人以上の人々が回遊し大きな賑わいを見せました。岡谷の僅か一店舗のお店は開業以来最高の人出になり、近隣の同業者を驚かせる結果となりました。地域づくりの活動は幾ら素晴らしい理屈を言ってもなかなか理解をしてもらうことは非常に難しいものですが、『スウィイチ』を通じて、人が動く結果を見せることで、今まで様子見をしていた団体やお店も、次回からは是非参加したい、と変わっていききました。



岡谷会場の様子 2012年

『スウィイチ』は本年2月で第6回を実施しましたが、実施エリアは諏訪地域6市町村メイン6会場、参加団体や個人合わせて約40、参加店舗約200軒まで広がり、約12000人の人が回遊する諏訪地域の冬のイベントに育ちました。この広がりには強制ではなく、全てロコミで、仲間が仲間を連れてくるという連携をベースに成立しています。



スウィイチらし 第2回 (2008年)

また、昨年から『さいか』の連携を活かして、新しい取り組みとして『スワシュラン』プロジェクトという活動を始めています。これは、『さいか』を支える諏訪を元気にしようとがんばっているメンバー自身がライターになり、手前味噌でも構わない、もっと知ってほしい諏訪、もっと楽しんでほしい諏訪を発信しようと立ち上げました。



スワシュラン 表紙

イベントは目的ではなく、人と人をつなぐきっかけづくりのための媒体のような役割であり、『さいか』は、『スウィイチ』や『スワシュラン』を足がかりにして仲間を増やし、お互いの相互補完、相互支援関係をつくっていくことを目的にしています。ひとつのグループ単位では人材や知恵に限りがありますが、足りない部分を他の団体や仲間が助け合うことができれば、結果的に全体の底上げに通じると考えています。

実際に『さいか』を通じて、空き店舗に開業をした、映画ロケのエキストラ募集やロケ地探し、地域のユルキャラづくり、商業グループの発足など、多彩な波及効果が『さいか』を通じて出来た出会いがきっかけに起きています。

4. 課題と展望

地域づくり活動における最大の課題は、その継続性とそれを支える担い手づくりだと考えます。どんなに素晴らしい活動でも、5年後、10年後、20年後も形は変わるかもしれませんが継続しなければ意味がありません。故にこの活動は『エンドレスの駅伝』のようなものだと思います。『さいか』にしてもこの活動の広がりや、何十年たっても持ち続けるためにはどうすればいいかという課題があります。そして、そのひとつの答えは、教育現場との連携だと思います。今年、スウィイチの会場を巡っていると少し変化に気がつきました。顧客ではなくスタッフ側に高校生をはじめとする学生スタッフが増えたことです。また、『スウィイチ』の事業調査に地元大学生も多く携わるようになりました。こういった若い世代が、何十年後に、今度は地域づくりにおける担い手の中心人物として還ってきてくれることが、真の地域づくりの継続性につながると考えます。